

魯迅作品における日本語的表現要素について¹⁾

陳 仲 奇

はじめに

1. 日中同形語と「日語借詞（日語外来語）」
 2. 日中同形異義語と魯迅作品
 3. 「紀念劉和珍君」
 4. 『野草』と『野草・題辭』
 5. 「祝福」と『呐喊』
- 結び

はじめに

魯迅は中国現代白話文の生みの親の一人である。五・四運動前後、胡適が『新青年』で白話文運動を提唱した際²⁾、魯迅はこれに呼応し、『狂人日記』、『阿Q正伝』などの名作を世に問い、白話文学の典型を広く示したわけである。しかし、魯迅にとっての日本留学は、その文学創作の養成期であったとも言えるにもかかわらず、魯迅作品と日本語ないし日本文学との関係については、いまだに研究者の間で重要視されたことはなかった。筆者の把握したところ、魯迅作品の日本語的要素に関する研究成果は皆無である。これは、魯迅自身が自らの日本留学については余りにも発言が少な過ぎるのも関係しているが、従来の魯迅研究者の間には、日中両国の言語と文学に関してある程度の隔たりがあった事も影響していると思う。中国の魯迅研究者の中には日本語の分る人が少なく、日本側の研究者も魯迅作品を全くの中国語の原典と見なしたため、魯迅作品にある日本語的要素は見落される羽目になっていたのが現状である。

筆者は日本留学の経験者であり、また幸いにも魯迅と同じく紹興地域の出身者である。魯迅作品を読むたびに、その作品の中にある日本語的要素としばしば出会った経験がある。そこで、魯迅作品を通して、現代中国語と日本語の関係を探ってみようと思うようになった。本稿はその最初の試みである。

本稿は以下のような仮説に基づいている。日中両国の文化交流は日中同形語に反映されているはずだが、日中両国とも同じく漢字を使用しているため、どちらが先であったかを特定するのはなかなか難しい。たとえ特定が可能であっても民族感情に左右され、必ずしも客観的な結論に導くことができるとは限らない。しかし、客観的な事実としては、日中同形異義語は特定の作者の作品に大量に存在しており、まるで砂浜に散在している「石」の如く、その時代の文化交流の潮流がかつて到達していたレベルを物語る証となっている。このような「石」の存在は、両国文化交流の道しるべにもなっている。その代表的なものは他ならぬ魯迅作品である。

このような両国文化交流の「標石」を発見・分析するには、通常の言語研究によく用いられる統計学的な分析手法は適切ではないと筆者は考える。一言にまとめれば、それを発見・分析するには具体的な作品を当時の時代環境に照らしながら、言語環境に還元してから、語句ごとに吟味しなければならないからである。

それでは、まず日中同形語から考えてみよう。

1. 日中同形語と「日語借詞（日語外来語）」

日中同形語は、日中両国の長い文化交流の歴史の中で形成された特有な文化現象であり、言語研究の視点から見ると、一般的には語彙論で取り扱うべきものであろう。しかし、本稿では、特に魯迅作品を対象として、その中に用いられた日本語的表現要素を一括して分析したいと思う。したがって、本稿で言う日中同形語は、単なる語彙論的な概念を意味するだけでなく、日中両国言語の文法的比較や社会風習に由来する言語習慣の相違も視野に入れていることを、まず断っておきたい。

周知の通り、日中同形語が形成された歴史の中には、日中両国にとって、文化の輸出と逆輸入というプロセスが存在している。おおよそ、中国の隋唐時代（西暦6世紀～8世紀）、日本は中国文化を学ぶため、数多くの留学僧、留学生を中国に派遣し、大量の中国の古代典籍を日本に持ち帰り、それを基にして日本民族の独特な漢文文化を創り上げた。これらの漢文漢語は、今日の日本語の中にも漢字表記として有機的に織り込まれている。それは例えば「来、去、一、二、三、天、地」などの単音節語彙に多く見られる。しかし、近代社会に入ると、状況が一変した。今度は日本文化が時代の先端を歩むようになった。明治維新以来、日本は「脱亜入欧」の国策の下で、積極的にヨーロッパの先進技術や文化を導入することに成功し、漢字の構詞原則に基づき、大量の現代社会・科学・技術用語を創出した。例えば「革命、政治、国家」などがそうである。これらの新しい用語は、中国からの留学生、または政府間交流の役人および商人らの手によって、日本から中国に逆輸入された。それらは主に二音節および多音節の語彙が多かった。日本語が中国語と同じく漢字表記を使用している以上、前者の中国語から日本語に輸入された漢字同形語を分析する必要がないため、日本の言語学界は、主に後者の日本語から中国語に逆輸入された漢字同形語を対象にして、「日中同形語」と名づけた。

しかし、前述したような日中同形語に対する考え方は、あくまでも日本語の立場に立って考えたものである。中国の言語学界では「中日同形語」という概念を使っていない。なぜならば、中国の立場に立って考えれば、漢字そのものは中国固有のものであり、日本語の中の漢字表記も、中国から習った漢字の構造原則に基づいて造られたものであるから、同じ形を呈しているのは当然なことであった。したがって、中国の言語学界は「中日同形語」という言い方を使用せず、「日語借詞」（日本語から借用した語彙）もしくは「日語外来語」という概念を使用するのが一般的である。

最初に「日語外来語」という概念を提起したのは、1958年出版された高名凱、劉正琰の『現代漢語外来詞研究』³⁾である。高・劉両氏は「日語外来語」について次のように述べた。「これらの外来語は我々のほとんどすべての文化部門、生活分野に『侵入』し、政治、経済、文学、芸術、哲学、科学、文化、教育などの領域だけではなく、たとえば日常生活の中の衣、食、住、行の各方面にも少なからず外来語が使われていたのである⁴⁾」。高・劉の

この観点はたちまち中国言語学界に注目され、1958年から1959年まで、中国言語学会の機関誌である月刊誌『中国語文』で広範囲な論争を巻き起こした。まず、王立達が『中国語文』2月号で論文を発表し、高・劉の論点に賛成しながらも、さらに一步踏み込んで、「日語借詞」という概念を打ち出した⁵⁾。王の言わんとするところは次の通りである。現代中国語の中で、日本語から借りた語彙は基本的に科学技術関係の語彙を中心とするが、日常生活に用いられる一般的な言葉にもたくさん見られる。『新名詞詞典』、『新知識詞典』などの辞書を調べれば、その半分以上は日本語から借用したものである云々。これに対する反論が直ちに現れた。『中国語文』58年6月号に「現代中国語の中に、日語借詞がそんなに多いのか」と題する張応徳の論文が載せられた⁶⁾。張論文によれば、「地主」「文法」などの語彙は、もともと古代漢語にあるものであり、たとえ日本語から借り入れ、新しい意味を持たせたとしても、「完璧帰趙（借りたものを少しも損なわずに帰す）」に過ぎなく、中国語の「旧詞新義」と理解すべきである。また、「時間、優點、参考書」などの新しい訳語も、日本人が漢字を使って西欧言語を訳しただけで、日本語の漢字「構詞法」だけでなく、中国語の「構詞法」にも合致している。こういった類のものに関しては、必ずしも日本語から借り入れたものだとも言い切れない、というのである。なお、王論文では、「基本建設」「居民点」などのような語彙は、直接日本語から来たものではないけれども、中国人が現代日本語の「構詞法」を運用して造った言葉だと断定している。これに対して、張応徳の反発はかなり猛烈なものであった。ここまで「日語借詞」を主張してしまうと、中国語の新名詞の半分どころか、ほぼすべてが日本から借りたものになってしまうのではなかろうか、これでは民族文化の虚無主義に陥ることが避けられないと張氏は危惧した。この議論は一旦収まったが、文化大革命の時期になって再び提起され、高名凱、劉正琰、王立達らが提唱した「日語外来語」の研究は、「民族投降主義」「文化虚無主義」の代表として批判され、こういう方面の学術研究も窮地に追い込まれた。

今からこの論争を振り返って見ても、中国における日中同形語研究の立場の難しさを垣間見ることができる。中国にとっては、「日語借詞」にしても、「日語外来語」にしても、必ず中国民族文化の自尊心の壁とぶつかりあい、純粋に客観的、中立的な立場に立って学術研究をはかることはなかなか困難な状況にある。片方、中国語が五・四運動の時期において、大量の外来語を日本から導入したことは客観的な事実である。この事実とどう向き合うか、またどう取り扱うべきかは、我々の前に置かれた重い課題である。

現代中国語研究の第一人者の王力が、かつて次のように指摘したことがある。中国語が外来語を大規模に取り入れた時期は過去二回ほどあった。一回目は、漢魏時代に仏教経典から導入された仏教語彙であり、二回目は五・四時代に日本経由で導入された西洋語彙である。「仏教語彙の導入は、中国歴史における一大事件ではあるが、西洋語彙に比べれば、その差は何千百分の一であろう。」「アヘン戦争から戊戌変法までに導入された新語の数は限りがある。戊戌変法から五・四運動までは、新語の増加が目立ち始めた。五・四運動以後は、一方ではすでに流行していた新語が定着しつつ、もう一方では、日を追って増長する文化需要に応じて、新語が絶え間なく生産されつづけたのである。現在、一篇の政治論文の中に、新語が往々にしてその七割以上を占める。語彙論的観点から見れば、最近五十年間における中国語の発展の速さは、過去の数千年にも勝ることになるのである⁷⁾」。

例えば、次のような新しい語彙は皆日本語を介在して導入されたものである。“淋巴”

（日音 rinpa, 英語 lymph）“ 倶楽部 ”（日音 Kurabu, 英語 club）“ 吨 ”（日音 ton, 英語 ton, tun）, “ 腺 ”（日音 sen, 英語 gland）“ 科学 ”（英語 science）“ 絶対 ”（英語 absolute）“ 象徴 ”（英語 symbole）“ 革命 ”（英語 revolution）“ 経済 ”（英語 economy 或いは economics）“ 政治 ”（英語 politics 或いは polity）“ 消費 ”（英語 consumption）などである。検討してみれば分かるように、これらの所謂「日語借詞」は、その構造、意義、字形の面において、ほとんどのものが中国語と基本的に一致しており、一部の語彙は古代漢語として日本に伝わったものであり、例えば、「政治」、「革命」などのように、日本がそれを改造して西洋の意味に入れ換え、また中国に逆輸入されたものもある。さまざまなパターンがあり、状況が極めて複雑であるため⁸⁾、一概に「日本から借り入れた」の一言では片付けられない。一部の研究者は構詞法の観点から、これらの語彙を「日語借詞」と断定するにはたいへん難しいところがあると指摘している⁹⁾。

筆者の考えでは、これらの語彙は日中両国の言語に共有されているため、無理に区別することは避けたほうが望ましい。なぜならば、我々が文法的、語法的構造の特徴からこれらの語彙の「国籍」を特定すること、即ち、どれが中国の古代漢語に由来するものか、どれが近代日本により改造・創出されたものかを見分けることがそもそも不可能に近いからである。たとえ統計学的手法を駆使して、特定単語の文献学的初見を確定することが技術的に可能だとしても、民族の自尊心を傷つける恐れが依然として残っている。国際的言語研究としては生産的方法だとはい底言えない。むしろ、これらの漢字語彙は、長い歴史の中で、日中両国民によって構築された文化伝統の一つであり、日中両国の文化遺産として共有すべきものである。この意味から言えば、中国側提案の「日語借詞」、「日語外来語」という概念よりも、日本側提案の「日中同形語」（中国の場合は「中日同形語」）の方がより両国言語研究の実情に即していると筆者は考える。

2. 日中同形異義語と魯迅作品

日中同形語の中に、特に留意すべき語彙がある。即ち、日中同形異義語である。それらの語彙は、形の上では日本語においても、中国語においても同じであるが、各自の言語体系の中に置かれたその語の性質や、品詞分類と意義などがそれぞれ違う様相を呈している。例えば、「裁判、嚴重、関心」などが挙げられよう。留学生が初めて相手国の言語を学習する時、また、翻訳者が作品を訳す時に、時々誤解・誤訳をもたらす障害となっている例がしばしば見受けられる。これは、近年、コミュニケーション言語論の観点から、中国の対外漢語教育と日本の外国人日本語教育の現場で盛んに問題提起されている¹⁰⁾。

このような日中同形異義語は、もう一つ重要な標記機能を持っている。というのは、五・四時期に大量の「日語借詞」が日本から中国へ逆輸入された時には、これらの同形異義語も他の同形語と一緒に流れ込んだと思うが、数十年経過した現在の時点に立って見れば、大多数の同形語はすでに中国語に吸収され、中国の人々はそれを中国語固有のものと同じように、まったく違和感なく日常生活の中で使っている。しかし、一部の同形異義語だけが中国社会で吸収されないまま残されており、まるで満潮時に荒波に運ばれてきた石が退潮後そのまま砂浜のあちこちに散在しているように、ひっそりと両国文化交流の過去を物語っているかのようである。

前にも言及したように、これらの同形異義語は、構詞法などの文法的考察では、その属

性を判別することがなかなか難しい。というのは、言語研究の目的は、言語現象の内的規則を発見するため、研究対象となる言語素材をできるだけ抽象化して普遍性を持たせるのが一般的である。しかし、「絶対」、「革命」などの語彙は、具体的な言語環境から隔離されてしまうと、いったい中国語のものか、それとも日本語のものかを断定することはできなくなる。しかし、魯迅作品の用例に還元して見ると、これらは明らかに日本語から借りたものだと言い切ることができる。なぜならば、魯迅は中国現代白話文の生みの親の一人であり、彼が白話文を創作した時、中国文語文の「湯武革命」から取り入れる動機も必要性も全くないのに対して、日本語から借り入れる条件は揃っていたからである。以上の理由で、筆者は魯迅作品を研究対象とすることは、日中同形語の語源的考察にとって有効だと考えている。

なお、筆者が魯迅作品を研究モデルにしたことには、もう一つの動機がある。即ち、この基礎的な整理作業により、日本語・日本文学が魯迅の文学創作に与えた影響を探ってみたいと思ったことである。魯迅は1902年2月に来日し、1909年中国に帰るまで、丸7年間日本に滞在した。このことから、魯迅は文学創作の準備期間を日本で過ごしたと言っても過言ではなからう¹¹⁾。しかしながら、魯迅自身が自分の日本留学に直接言及したことは極めて少ない。『朝花夕拾』¹²⁾にある「紀念藤野先生」の一篇の外に、ほとんど断片的なものしか見られない¹³⁾。現在の魯迅研究では、若い頃の魯迅に関する資料は、基本的に実弟である周作人および数名の親友の紹介文章に頼っている。ところが、周作人の『魯迅的青年時代』¹⁴⁾などの著作を見ても、「魯迅在東京」に書いてあるような事実関係の紹介や、或いは「關於魯迅」、「關於魯迅之二」のような文学成果の評価とその学術的・思想的源流の紹介にとどまり、肝腎の日本語や日本文学と魯迅文学との関連についてはあまり触れていない¹⁵⁾。筆者が推測するには、恐らく、その文学創作における日本という背景は、魯迅や周作人にとっては、まるで自らの足で踏んでいる大地と同じく、特別に取り上げるほどのものではなく、当然であり、自明な存在であるかも知れない。しかし、今日、我々の魯迅研究にとっては、これらの背景材料の欠如は致命的な弱点になっている。

以上が筆者の魯迅研究の出発点であるが、以下、魯迅作品における日本語的表現要素を具体的に検討してみよう。

3. 「紀念劉和珍君」

魯迅の「紀念劉和珍君」¹⁶⁾は、1926年4月12日の週刊誌『語絲』第74号に発表されたものである。劉和珍(1904年 - 1926年)は元国立北京女子師範大学の学生であり、同年3月18日に天安門で起きたいわゆる「三一八惨案」¹⁷⁾に参加したため、段祺瑞臨時執行政府の警備隊に射殺された。魯迅は劉和珍と同時に遭難したもう一人の女子師範大学の学生楊徳群(1902年 - 1926年)を記念するため、この文章を書き上げたのである。魯迅にとって、劉和珍は自分の愛弟子の一人であり、また、いわゆる「女師大風潮」、学校当局との確執の中でともに戦ってきた親友の一人でもあった。それゆえ、この文章はたいへん感情の込められた力作となった。現代中国の中学国語教科書にも取り入れられ、若者の間で馴染みのある名文として、いまだに人気を博している。

しかし、この名文の中には、意外に多くの日本語的要素が使われている。筆者も中学生時代に一応習ったことはあるが、当時はその中の日本語的要素をまったく意識しなかつ

た。今日の魯迅研究者の中にも、恐らくそれを認識している人はあまりいないであろう。以下、その中で最も有名な語句を紹介しておく。

真的猛士，敢于直面惨淡的人生，敢于正视淋漓的鲜血。

沉默呵，沉默呵！不在沉默中爆发，就在沉默中灭亡。

これを原文の字句を残しながら直訳してみると、次のようになる。

真の猛士は、敢えて惨憺たる人生に直面し、敢えて淋漓なる鮮血を正視する。

沈黙よ、沈黙よ、沈黙の中で爆発しなければ、沈黙の中で滅亡するしかない。

これはまったく立派な日本語ではないであろうか。現代中国語では、「真的」は「真正的」、「猛士」は「勇士」、「直面」は「面对」となるべきであるが、しかし、魯迅のこの名セリフは日本語とまったく合致している。この種の表現例は、魯迅と周作人兄弟二人の文章の中では、決してまれではない。筆者は、これを中国語と見るより、むしろ日本語の表現を生かしたものだと考えたほうがより合理的だと思っている。

実は「紀念劉和珍君」の題名にも、日本語的要素が見られる。中国語における「君」の使い方は、たとえば『楚辞』にある「湘君」、『戦国策』にある「春申君」などのように、地位の高い人物に対する敬称である。しかし、日本語では、自分より地位の低い人、または年齢が若い人に対する呼び方にも使っている。劉和珍はかつて魯迅の授業を受講したことがあるので、日本語の慣習によれば、魯迅が彼女のことを「君」と呼ぶのは当然ということになる。しかし、中国人でここまで「君」の意味を真に理解した人はほとんどいないであろう。恐らく劉和珍が壮烈な死を遂げたため、「烈士」であるが故に「君」という尊称が使われたと想像しているに違いない。筆者はかつて東京大学のある教授から愚痴を聞かされたことがある。その先生のところ、中国の若者から弟子になりたいという主旨の手紙が来た。封筒には「××××君 収」と書いてある。なぜ自分のことを「君」と呼んだのか、その先生は不思議でたまらなかった。筆者による「君」の中国語の意味の解釈を聞いてから、やっとなるほどとうなずいたのである。笑い話のようなこの例は、まさに日中異文化ショックの好い例だと言えよう。

また、「出離憤怒」という言葉に対しても、中国人はなかなか理解しにくい。この言葉は魯迅が「紀念劉和珍君」の中で初めて使ったため、人々の耳には非常にインパクトのある言葉として響いた。今では四字成語に近いものになっている。筆者はかつてある Web ページでそれをめぐる議論を見たことがある。ある人が「出離憤怒是什么意思?（「出離憤怒」はどういう意味ですか）」と聞いたのに対して、ある人は「从愤怒中出来并离开，也就是不愤怒了（憤怒から出て離れていく、即ち怒らなくなった）」、ある人は「是出奇离谱的愤怒（桁離れの憤怒）」と答え、またある人は「这是鲁迅新创的词，问鲁迅本人最好（これは魯迅が作った言葉だから、魯迅本人に聞きなさいよ）」とふざけていた。実は、人民文学出版社版の『魯迅全集』にも、正式な中学の教科書にも、この言葉に対する注釈はなかった。人々は文章の前後関係から、「憤怒の極まり」と理解しているのが実状のようである¹⁸⁾。しかし、日本語の「出離れ」、「出外れ」という言葉が元々「宿駅のはずれ、町並などの尽きた所」という意味であることを考え合わせれば、魯迅の「憤怒の尽きたところに来た」という原意はそれほど難解なものでもなからう。

魯迅の「紀念劉和珍君」には、その他の日本語的表現要素も多用されている。問題をはっきりさせるため、以下でそれらの文例を検討してみよう。一見して日本語から借り入

れたことが分るものに対しては、アンダーラインをつけるのみにして、分析・解釈の必要があるものは括弧をつけて簡単な説明を加えることにする。

我已经出离愤怒了。我将深味这非人间的浓黑的悲凉；以我的最大哀痛显示于非人间，使它们快意于我的苦痛，就将这作为后死者的菲薄的祭品，奉献于逝者的灵前。（「深味」は、深く味わうの意。中国語では通常使わない。「非人間」は、人間ではないこと、即ち、悪魔や妖怪などの類、ここでは段祺瑞臨時執行政府のことを指す。中国語の「人間」は一般に世間、世の中の意味になる。「灵前」は、日本語の「霊前」と同様の意味である。中国語の中では「灵」は幽霊のことを指すため、「守灵」、「祭灵」、「灵寝」、「灵案」などの語彙はあるが、「灵前」という言葉は一般的な使い方ではない。）

在这淡红的血色和微漠的悲哀中，又给人暂得偷生，维持着这似人非人的世界。我不知道这样的世界何时是一个尽头！（「血色」は血の色。中国語の「血色」は、たとえば人の顔色がいいことを「血色很好」と言うように赤い「色」を指し、日本語のように「血」の色という意味では使わない。）

我向来是不惮以最坏的恶意，来推测中国人的，然而我还不料，也不信竟会下劣凶残到这地步。（「不惮」が日本語の「憚らず」に由来していることは一目瞭然である。たとえば「余岂憚乎」のごとく、古代漢語の「憚」は恐れるの意味である。現代漢語の中にも「肆无忌惮」という言葉があるが、「不憚」という使い方は極めて稀であるにも拘らず、魯迅作品には多用されている。）

至于这一回在弹雨中互相救助，虽殒身不恤的事实，则更足为中国女子的勇毅，虽遭阴谋秘计，压抑至数千年，而终于没有消亡的明证了。倘要寻求这一次死伤者对于将来的意义，意义就在此罢。（「殒」は、死亡すること。たとえば「殒身」、「殒命」など、古代漢語と日本語は同じである。「恤」は、惜しむこと。古代漢語と日本語の両方に通用する。『尚書』に「我后不恤我衆」とあるが、これを日本語漢文では「我が后我が衆を恤まず」と訓読する。現代中国語では「不恤」の用法は極めて少ないが、これも魯迅がよく使う。日本語では「うれえず」の使い方由来するものか。）

苟活者在淡红的血色中，会依稀看见微茫的希望；真的猛士，将更奋然而前行。（「奋然而前行」は、奮って前へ行くこと。中国語では「奋勇前进」という。「奋然」とは余り言わない。）

以上により、「紀念劉和珍君」の一編の中に、魯迅がどれだけ多くの日本語的表現を用いているかが分った。考えてみれば、これは少しも不思議なことではない。なぜならば、魯迅は南方の紹興市の出身者であり、北方言語に対する知識はもともと乏しいことが容易に察知できる。彼が時には北方方言の「马虎（いい加減）」を「模胡」と標記したのもそれを証明している¹⁹⁾。言い換えれば、魯迅が自由に駆使できる言葉は、紹興方言以外は、恐らく日本語であったと推察できる。また、魯迅にとって、文語体を書くことはなんら支障がないが、胡適の主張した白話文の創作活動を行うとなると、かなり無理があったと言えよう。彼が自分の把握するすべての言語知識を最大限に活用して、紹興方言、日本語、文語などのそれぞれの言語要素を自らの文学創作の中に取り入れることは、当然であつたらう。魯迅作品が現代白話文の典型となった今日、我々はその成果の輝きに目を奪われ、却って事の真相を見失ってしまったのではなからうか。

4. 『野草』と『野草・題辞』

鲁迅作品の日本語的表現は、決して「紀念劉和珍君」だけに見られるものではない。散文集『野草』には、より広範囲で多様な文例が存在する。しかし、従来の見解としては、これらの表現は独特な文体の風格を構成する要素と解釈され、日中同形語という視点からの検証はなされていなかった。筆者が『野草』を瞥見しただけでも、少なくとも以下のような典型的な日本語的表現の例があった。前と同様、下線を付したところは日本語から借りたものである。（以下同じ）

我只得由我来肉薄这空虚中的暗夜了，纵使寻不到身外的青春，也总得自己来一掷我身中的迟暮。但暗夜又在那里呢？现在没有星，没有月光以至笑的渺茫和爱的翔舞；青年们很平安，而我的面前又竟至于并且没有真的暗夜。绝望之为虚妄，正与希望相同！（「肉薄」は「肉迫」とも書き、日本語と同様に自分の体をもって敵陣に迫る意味で使われているが、中国語ではこういう意味で使われない。「暗夜」も、直ちに志賀直哉の名作『暗夜行路』を思い浮かべるように、日本語であり、中国語では「黑夜」と言う。「一掷」については、古代漢語に「一擲千金」という成語があったが、現代中国語では「一掷」を単独で使うことはない。しかし、日本語では動詞として使い、最も有名なのは「乾坤一擲」という用例がある。）

『野草・希望』

我现在在那里呢？四面都还是严冬的肃杀，而久经诀别的故乡的久经逝去的春天，却就在这天空中荡漾了。（「肃杀」は厳しい秋気が草木を損ない枯らすこと。このような使い方では現代中国語にはない。）

他的这些，在我看来都是笑柄，可鄙的。（「可鄙的」は、中国語では軽蔑すべきことを意味するが、ここではみっともない、格好が悪いの意味で使われている。）

论长幼，论力气，他是都敌不过我的，我当然得到完全的胜利，于是傲然走出，留他绝望地站在小屋里。后来他怎样，我不知道，也没有留心。（「完全的胜利」については、中国語では「大获全胜」、「彻底胜利」と言うが、「完全的胜利」とは普通言わないのに対し、日本語には「完勝」や「完全な勝利」がある。）

于是二十年来毫不忆及的幼小时候对于精神的虐杀的这一幕，忽地在眼前展开，而我的心也仿佛同时变了铅块，很重很重的堕下去了。（「虐杀」は、たとえば「捕虜を虐殺する」というように、日本語では「むごたらしい手段で殺すこと」の意味で使われるが、中国語はあまり使わない。その代わりに、「屠杀」、「扼杀」を使用する。周作人が数十年後、「鲁迅与弟兄」の中にこの文章を引用した際、わざわざ「虐杀」を「虐待」に改めている²⁰⁾。）

以上『野草・風箏』

但倘若用一柄尖锐的利刃，只一击，穿透这桃红色的，菲薄的皮肤，将见那鲜红的热血激箭似的以所有温热直接灌溉杀戮者；其次，则给以冰冷的呼吸，示以淡白的嘴唇，使之人性茫然，得到生命的飞扬的极致的大欢喜；而其自身，则永远沉浸于生命的飞扬的极致的大欢喜中。（「只一击」は、ただ一撃。内田百閒は「鮭の一撃」という文章を書いたこともある²¹⁾。中国語ではこのような使い方はない。「其次」は、その次の意で、中国語

の「接着」、「接下来」に相当する。)

『野草・復仇』

因为或一种原因，我开手编校那历来积压在我这里的青年作者的文稿了；我要全都给一个清理。我照作品的年月看下去，这些不肯涂脂抹粉的青年们的魂灵便依次屹立在我眼前。他们是绰约的，是纯真的，——阿，然而他们苦恼了，呻吟了，愤怒，而且终于粗暴了，我的可爱的青年们！（「或一种」は「或る一種」で、中国語の「某种」の意味。「依次」は「順番に」という意味、中国語では「一个接一个」と言う。「屹立」は人が少しも動かず直立する様相を言っているが、中国語では山や岩などにしか使わない。「粗暴」は性質や挙動の荒々しいこと、乱暴なことを意味するが、この場合、中国語では通常「粗野」と言う。)

“有人说：我们的社会是一片沙漠。——如果当真是一片沙漠，这虽然荒漠一点也还静肃；虽然寂寞一点也还会使你感觉苍茫。何至于像这样的混沌，这样的阴沉，而且这样的离奇变幻！”（この表現は中国語で読む限り、二転三転という奇異な婉曲な感じにもするが、日本語なら極普通の表現になる。もし本当に……であれば、……だが、……はまだあるだろう。こんなに……になることはないだろう。)

以上『野草・一覚』

『野草・題辞』にいたっては、用語にしる、構文にしる、ほとんど全篇が日本語の構文に暗合している。原文の字句をなるべくそのまま生かしながら、その代表的な段落を試訳してみると次のようになる²²⁾。驚くべきことに、その読み下し式の直訳は中国語原文よりもむしろ自然な文体になっているように思える。

当我沉默着的时候，我觉得充实；我将开口，同时感到空虚。（私は沈黙している時は、充実を覚え、私は口を開けようとすると、同時に空虚を感じる。）

过去的生命已经死亡。我对于这死亡有大欢喜，因为我借此知道它曾经存活。死亡的生命已经朽腐。我对于这朽腐有大欢喜，因为我借此知道它还非空虚。（過去の生命はすでに死亡した。私はこの死亡に対して大歓喜を感じる。私はそれによって生命が曾って存活していたことを知ることができるためだ。死亡の生命はすでに朽腐した。私はこの朽腐に対して大歓喜を感じる。私はそれによって朽腐した生命が空虚ではないことを知ることができるためだ。)

天地有如此静穆，我不能大笑而且歌唱。天地即不如此静穆，我或者也将不能。我以这一丛野草，在明与暗，生与死，过去与未来之际，献于友与仇，人与兽，爱者与不爱者之前作证。（天地がこんなに静穆であれば、私は大笑いしたり歌を歌ったりすることができないだろう。天地がこんなに静穆でなくても、私はそれをするのができないかもしれない。私はこの一束の野草を、明と暗、生と死、過去と未来の間において、友と仇、人と獣、愛する者と愛さない者の前に献上し、証にしたい。)

为我自己，为友与仇，人与兽，爱者与不爱者，我希望这野草的死亡与朽腐，火速到来。要不然，我先就未曾生存，这实在比死亡与朽腐更其不幸。（私自身のため、また、友と仇、人と獣、愛する者と愛さない者のために、私はこの野草の死亡と朽腐が速やかに到来することを希望する。さもなければ、まず私自身が生存しなかったことになり、

これまた死亡と朽腐よりもさらに不幸なことである。）

去罢，野草，连着我的题辞！（行け。野草よ、私のこの題辞とともに。）

筆者はここまで試読してみた結果、一つ重要な事実に気づいた。それは、『野草・題辞』の文章表現と日本語の間に何らかの関連があるに違いない、ということである。なぜならば、偶然な暗合とは到底言い切れない部分があるからである。

魯迅の文章風格は「沈鬱」という一言で概括できる。鋭い思想的洞察力、抑圧された重厚かつ憂鬱な感懐が、たぐいまれな言語表現で表され、魯迅特有な風格を構築している。魯迅の言語表現は、決して流麗軽快なものではなく、渋味のあるもので、時には凜然とした風骨が現れる。まるで深流が雑然とした山石の間を流れるように、でこぼこの中で、時には奔突して激流となり、時には低回しながら渦巻きとなって、奇異な景観を呈して人々を魅了する。これは魯迅作品に対する定評である。しかし、筆者は、魯迅作品の日本語的表現要素を抽出し、これらを検討した後、もう一度魯迅の作品を読み直してみると、案外に読みやすいと感じた。しかも、そこには、明治・大正時代に流行った文体と似ているところが読み取れるのである。

そこから推論できるのは、即ち、魯迅作品の日本語的表現は、決して無意識の内に自然に流露されたものではなく、それは作者の意図によったものだということである。

5. 「祝福」と『呐喊』

ここまで検討してきた「紀念劉和珍君」と『野草』はともに散文体であったが、次に視野を『彷徨』中の「祝福」および『呐喊』などの小説にまで広げて、その具体例を挙げて説明を付しておくことにする。

旧历の年底毕竟最像年底。（「最像年底」は、最もお正月らしいの意。）

况且，一直到昨天遇见祥林嫂的事，也就使我不能安住。（「安住」は、安んじてとどまること、落ち着いてすむこと。日本語では「安住の地」などと良く言うが、中国語ではほとんど使わない。）

只有那眼珠间或一轮，还可以表示她是一个活物。（「活物」は、生き物のこと。この場合、中国語では普通「她还活着」と言う。）

以上『彷徨・祝福』

“这等事问他什么。你真会……说笑话。……今天天气很好。”（これまた魯迅の名セリフである。中国人の挨拶語は普通「你吃饱了吗？」などあるが、天気は挨拶語として使うのはおそらく魯迅が最初である。魯迅は、日本語の「今日の天気はいいですね」という挨拶習慣から皮肉の意味を織り込んで造った言葉だと思われる。）

他们是只会吃死肉的！——记得什么书上说，有一种东西，叫“海乙那”的，眼光和样子都很难看；时常吃死肉，连极大的骨头，都细细嚼烂，咽下肚子去，想起来也教人害怕。（「死肉」は、死体の肉のことであるが、中国語では「腐肉」或いは「死動物的肉」と言う。「海乙那」は、ハイエナ。中国語では「鬣狗」と言う。）

有了四千年吃人履历的我，当初虽然不知道，现在明白，难见真人！（「履历」は、履歴、経歴のことであるが、中国語では「经历」、「历史」と言うべきである。）

『呐喊・狂人日記』

我可是觉得在北京仿佛没有春和秋。老于北京的人说，地气北转了，这里在先是没有什么和暖。只是我总以为没有春和秋；冬末和夏初衔接起来，夏才去，冬又开始了。（春、夏、秋、冬という使い方は、古代漢語と日本語とは同じであるが、現代中国語では普通、春天、夏天、秋天、冬天と言う。）

『呐喊・鴨的喜劇』

他这样想着的时候，有时也疑心是因为自己没有和恶社会奋斗的勇气，所以瞒心昧己的故意造出来的一条逃路，很近乎“无是非之心”，远不如改正了好。然而这意见总反而在他脑子里生长起来。（「恶社会」は中国語なら「罪恶社会」と言う。この「意見」は日本語の意見と同じ意味。中国語では普通「念头」、「想法」と言う。）

虽然也缺钱，但从没有加入教员的团体内，大家议决罢课，可是不去上课了。政府说“上了课才给钱”，他才略恨他们的类乎用果子耍猴子；一个大教育家说道“教员一手挟书包一手要钱不高尚”，他才对于他的太太正式的发牢骚了。（「議決」は、合議して決定すること。日本語ではよく使うが、中国語では「讨论決定」を使う）

……。“差不多”这一个影子在他眼前又一幌，而且并不消灭，于是他便在讲堂上公表了。（この「消灭」は日本語の「消滅」の意味で使われている。中国語では他動詞であり、ここでは「消失」と言うべきである。「公表」は、おもてむきにすること、世間に発表することで、日本語では普通に使われている言葉だが、中国語では「公表」ではなく、「公布」を使う。）

『呐喊・端午節』

二嫂发觉了这件事，自己很以为功，便拿了那狗气杀……。（日本語には「発見」、「発現」の両方があるが、中国語には「发现」はなく、代わりに「发觉」、「发现」を使う。また、日本語の「発現」には中国語の「发明」と同じ意味がある。）

『呐喊・故郷』

他们往往要亲眼看着黄酒从坛子里舀出，看过壶子底里有水没有，又亲看将壶子放在热水里，然后放心：在这严重兼督下，属水也很为难。（この「严重」は、日本語の「嚴重」と同様、単に厳しい意である。これに対して中国語の「严重」は、程度の深刻さを表す。）

掌柜是一副凶脸孔，主顾也没有好声气，教人活泼不得；（中国語の「活泼」は性格を形容する場合に使うのに対して、日本語では、「活発な議論」というように、動作のいきいきしている様子を言う。ここでは後者の意味で使われている。）

以上『呐喊・孔乙己』

在东京的留学生很有学法政理化以至警察工业的，但没有人治文学和艺术；可是在冷淡的空气中，也幸而寻到几个同志了，此外又邀集了必须的几个人，商量之后，第一步当然是出杂志，名目是取“新的生命”的意思，因为我们那时大抵带些复古的倾向，所以只谓之《新生》。（日本語の「美術」は、本来、芸術の一般を指し、現在では絵画、彫刻、書、建築、工芸などの造形芸術を意味するが、この「美术」は前者の意味で用いられている。現代中国語ではこういう用例はない。「必須」も「大抵」も日本語の「必須」、「大抵」と同じ意味で使われているが、中国語ではこういう言い方はない。）

我感到未尝经验的无聊，是自此以后的事。我当初是不知其所以然的；后来想，凡有一人的主张，得了赞和，是促其前进的，得了反对，是促其奋斗的，独有叫喊于生人中，而

生人并无反应，既非赞同，也无反对，如置身毫无边界的荒原，无可措手的了，这是怎样的悲哀呵，我于是以我所感到者为寂寞。（「生人」、中国語の「生人」は知らない人のこと、「熟人」の反対の意味である。ここの「生人」という語彙は、魯迅が日本語の「生身の人間」から作った新語かもしれない。）

“假如一间铁屋子，是绝无窗户而万难破毁的，里面有许多熟睡的人们，不久都要闷死了，然而是从昏睡入死灭，并不感到就死的悲哀。现在你大嚷起来，惊起了较为清醒的几个人，使这不幸的少数者来受无可挽救的临终的苦楚，你倒以为对得起他们么？”（「死灭」は、現在の中国では使わないが、日本では「死滅」が普通に使われている。「就死」は、もうすぐ死ぬこと。中国語では「将死」と言う。）

在我自己，本以为现在是已经并非一个切迫而不能已于言的人了，但或者也还未能忘怀于当日自己的寂寞的悲哀罢，所以有时候仍不免呐喊几声，聊以慰藉那在寂寞里奔驰的猛士，使他不惮于前驱。至于我的喊声是勇猛或是悲哀，是可憎或是可笑，那倒是不暇顾及的；但既然是呐喊，则当然须听将令的了，所以我往往不恤用了曲笔，（「切迫」は日本語の「切迫」の意味に近い。ここで言う「切迫」は、中国語では「緊迫」と言う。「不憚」と「不恤」については、前に述べた通りである。）

所以我竟将我的短篇小说结集起来，而且付印了，又因为上面所说的缘由，便称之为《呐喊》。（「竟」は、おえる、おわる、最後の境界までとどくの意だが、中国語ではこういう用い方はしない。）

以上『呐喊・自序』

但可惜这姓是不甚可靠的，因此籍贯也就有些决不定。（中国語で「说不准」とは言うが、「決不定」とは言わない。日本語の「決定」、「決定しきれない」に由来するものと思う。）

但对面走来了静修庵里的小尼姑。阿Q便在平时，看见伊也一定要唾骂，而况在屈辱之后呢？他于是发生了回忆，又发生了敌忾了。（「敌忾」は、日本語では「敵愾」と書き、敵愾心という言葉はよく使われる。しかし、中国語では「同仇敌忾」という使い方はあるが、こういう用例は稀である。）

然而我们的阿Q却没有这样乏，他是永远得意的：这或者也是中国精神文明冠于全球的一个证据了。（「乏」は、中国語では気力がないという意味だが、日本語ではとぼしい、まずしいのほか、能力がない、つまらないという意味もある。ここでは「穷极无聊」という意味で使われている。魯迅はこの使い方を常用する。例えば、「丧家的资本家的乏走狗」²³⁾。）

大家都恍然，没有话。赵太爷父子回家，晚上商量到点灯。赵白眼回家，便从腰间扯下搭连来，交给她女人藏在箱底里。（「恍然」は、日本語の「惘然」。中国語ではこういう意味に用いない。）

他省悟了，这是绕到法场去的路，这一定是“嚓”的去杀头。他惘惘的向左右看，全跟着蚂蚁似的人，而在无意中，却在路旁的人丛中发见了一个吴妈。很久违，伊原来在城里做工了。（中国語では「久违了」とは言うが「很久违」とは言わない。日本語の「たいへん久しぶり」から来たと思われる。）

《小孤孀上坟》欠堂皇，《龙虎斗》里的“悔不该……”也太乏，还是“手执钢鞭将你打”罢。（ここの「乏」も の例と同様、つまらないの意味。）

车子不住的前行，阿Q在喝采声中，轮转眼睛去看吴妈，似乎伊一向并没有见他，却只是出神的看着兵们背上的洋炮。（「前行」、魯迅が日本語の「前へ行く」を学んで造った言葉、現代中国語なら「前进」と言う。「一向」、中国語は「从来」の意味であるが、この「一向」は日本語の「一向に」に近く、全然、全くの意味である。中国語の「見」は、たとえば「见到」、「会见」などのように受動的な意味であるのに対し、日本語の「見る」は中国語の「看」と同じ能動的な意味を持っている。）

以上『阿Q正伝』

那黑猫是不能久在矮墙上高视阔步的了，我决定的想，于是又不由的一瞥那藏在书箱里的一瓶青酸钾。（「久」は久しくの意であり、「阔歩」、「決定」、「一瞥」も日本語と同様の意味に用いられている。「高視」は高いところから下の騒ぎなどを見物すること、転じて、直接関係のない気楽な立場で、事の成り行き傍観することを言うが、こういう言い方は中国語では無理がある。）

『兔和猫』

我们退到后面，一个辫子很光的却来领我们到了侧面，指出一个地位来。这所谓地位者，原来是一条长凳。（この「地位」は、位の意味ではなく、存在する場所、位置を指すが、中国語ではこういう使い方はできない。）

这一夜，就是我对中国戏告了别的一夜，此后再没有想到他，即使偶而经过戏园，我们也漠不相关，精神上早已一在天之南一在地之北了。（「告别」に関しては、中国語では、離合詞ではないため、目的語を持つことができないが、日本語では、別れを告げるの意味で、目的語を持つことができる。）

我们每天的事情大概是掘蚯蚓，掘来穿在铜丝做的小钩上，伏在河沿上去钓虾。虾是水世界里的呆子，决不惮用了自己的两个钳捧着钩尖送到嘴里去的，所以不半天便可以钓到一只。（「水世界」や「雪世界」などの言い方は中国語にはない。「决不惮」については前述した通り。「不半天」は、日本語の「半日足らず」という意味。）

我的很重的心忽而轻松了，身体也似乎舒展到说不出的大。（「很重的心」は、とても重い気持ち。）

两岸的豆麦和河底的水草所发散出来的清香，夹杂在水气中扑面的吹来；月色便朦胧在这水气里。淡黑的起伏的连山，仿佛是踊跃的铁的兽脊似的，都远远的向船尾跑去了。（この「发散」は他動詞として用いられており、中国語では普通「散发」と言う。「水气」については、中国語の「水气」は潮湿の意味であるが、日本語の「水気」は、水気、みずけ、しめりけ、水蒸気、水煙の意味になる。「连山」についても、中国語の「连山」は、夏時代の易、三易の一つであるが、日本語の「連山」なら、連なった山々、連峰の意味に使われる。）

以上『社戯』

媪 面河的农家的烟突里，逐渐减少了炊烟，女人孩子们都在自己门口的土场上泼些水，放下小桌子和矮凳；人知道，这已经是晚饭的时候了。（「煙突」は日本語。中国語では「烟囱」と言う。）

媪 九斤老太自从庆祝了五十大寿以后，便渐渐的变了不平家，常说伊年青的时候，天气没有现在这般热，豆子也没有现在这般硬；总之现在的时世是不对了。（「不平家」は、よく不平を言う人のこと。日本語では「浪費家」、「健啖家」などの用例が多いが、中国語で

は、悪い事物については、あまり「家」とは言わない。）

媼 土场上一片碗筷声响，人人的脊梁上又都吐出汗粒。（「吐出」は、日中両国とも口または胃の中にあるものを外へ吐き出すの意味だが、日本語の方は、（いちどきに）内から外へ出すという意味もあり、ここでの原意に近い。）

嬰 赵七爷是邻村茂源酒店的主人，又是这三十里方圆以内的唯一的出色人物兼学问家；因为有学问，所以又有些遗老的臭味。（「主人」は、中国語の場合、「店主」、もしくは「老板」と言う。「臭味」は、身に染み付いたよくない気風・気分の意味。これは明らかに日本語の意味と共通している。古代漢語では日本語と同じ意味で使われていたが、現代中国語は臭みの意味にしか使わない。）

媼 七爷也一路点头，说道“请请”，却一径走到七斤家的桌旁。七斤们连忙招呼，七爷也微笑着说“请请”，一面细细的研究他们的饭菜。（この「们」は、中国語では特定でないものの複数にしか使えない。例えば、「同学们」と言えるが、「王老师们」、「爸爸们」とは言えない。しかし、ここでの使い方は、日本語の「たち（達）」、「ら（等）」の使い方と同じで、明らかに日本語の影響を受けている。）

婆 看客中间，八一嫂是心肠最好的人，抱着伊的两周岁的遗腹子，正在七斤嫂身边看热闹；（「看客」は観客、見物人で、特に、映画・演劇などを見る人を指す。中国語では普通は「观众」と言う。しかし、魯迅は「看客」という言葉を常用する²⁴⁾。）

媼 他（八一嫂のこと）心里但觉得事情似乎十分危急，也想些方法，想些计画，但总是非常模糊，贯穿不得。（「计画」は、中国語の場合、「计划」と言う。「贯穿不得」は突通ることができないこと、ここではイメージが繋がらない意味である。）

以上『風波』

媼 多少故人的脸，都浮在我眼前。几个少年辛苦奔走了十多年，暗地里一颗弹丸要了他的性命；几个少年一击不中，在监牢里身受一个多月的苦刑；几个少年怀着远志，忽然踪影全无，连尸首也不知那里去了。（「故人」は、王之涣詩に「故人已乘黄鹤去」とあるように、中国語では昔の人の意である。しかし、ここでは日本語と同様に「死去した人」を指す。この「弹丸」は、日本語の「弾丸」と同じ意味。中国語の「弹丸」は泥丸を指し、いわゆる銃の弾を指すなら「子弹」と言う。）

嬰 过了几年，我的家景大不如前了，非谋点事做便要受饿，只得也回到中国来。我一到上海，便买定一条假辫子，那时是二元的市价，带着回家。我的母亲倒也不说什么，然而旁人一见面，便都首先研究这辫子，待到知道是假，就一声冷笑，将我拟为杀头的罪名；有一位本家，还预备去告官，但后来因为恐怕革命党的造反或者要成功，这才中止了。（「非谋点事做便要受饿」の場合、中国語では「非……不可」のような否定形にしなければならぬが、日本語では「……でなければ、……である」という言い方が可能である。「因为恐怕」の場合も、中国語では連用できないが、日本語では「……かもしれないため」という意味で連用できる。）

以上『頭髮的故事』

媼 单四嫂子等候天明，却不像别人这样容易，觉得非常之慢，宝儿的一呼吸，几乎长过一年。（「一呼吸」は、中国語では「一次呼吸」と言う。）

媼 单四嫂子接过药方，一面走，一面想。他虽是粗笨女人，却知道何家与济世老店与自己的家，正是一个三角点；自然是买了药回去便宜了。（「便宜」は、日本語ではその場合に

応じて、都合のよいように処理することを指す。中国語でも「便宜 biàn yí」と発音した場合は、日本語の意味と同じだが、多くの場合は「便宜 pián yì」と読み、「安い」の意味に使う。)

婷 但单四嫂子待他的宝儿，实在已经尽了心，再没有什么缺陷。昨天烧过一串纸钱，上午又烧了四十九卷《大悲咒》；收敛的时候，给他穿上顶新的衣裳，平日喜欢的玩意儿，——一个泥人，两个小木碗，两个玻璃瓶，——都放在枕头旁边。后来王九妈掐着指头子细推敲，也终于想不出一些什么缺陷。(この「缺陷」は、欠けて足りないもの、不足、不備、欠点のことであるが、中国語の「缺陷」は、主に商品の不備、人の性格や生理的な欠陥を指す。ここの場合は「缺憾」を使うのが一般的だと思う。)

媠 太阳渐渐显出要落山的颜色；吃过饭的人也不觉都显出要回家的颜色，——于是他们终于都回了家。(「不觉」は、副詞として使われている。中国語では「不知不觉地」という言い方のほうが一般的であるが、日本語では「思わず知らずすること」の意味で使われる。)

以上『明天』

ここまでの文例分析から分るように、魯迅作品における日本語的表現要素は、決して単なる逆輸入ではなく、魯迅が独創的にそれを中国語の有機的な一部分として創り上げたということである。魯迅の取った手法は次のような三つのパターンに分けることができる。一、日本語の語彙をそのまま使う。二、日本語の語法的構造原則を鑑みにして、独自の新語を作り出す。三、語彙だけではなく、文法や表現習慣まで、日本語的な栄養分を文脈の中に巧みに織り込んでいたもの。この三つの手法を使い分けることによって、魯迅は中国現代白話文の典型を模索し、創り上げたのである。

結び

以上、魯迅の主な作品を中心に分析した結果、魯迅作品には日本語的表現がたくさんあることが明らかになったと言えよう。もちろん、本稿の分析はたいへん簡略で、限定的なものである。しかし、この手法で魯迅の全作品を分析して見れば、より多くの例が浮かび出てくることは確かであろう。

最後に、本稿の意図について、もう一言を付け加えたい。筆者は魯迅作品にある日本語的表現要素を指摘してきたが、それは少しも魯迅作品の価値に疑念を抱くことを意味しない。魯迅作品はすでに現代中国の国民文学の典型となっている。彼の手によって取り入れられた日本語的表現は、すでに中国文化の一部となった。例えば「全然」、「出离愤怒」、「今天天气哈哈!」、「丧家的资本家的乏走狗」などの類のものは、枚挙にいとまない。文化は発展するものであり、限定するものではない。今さらこれは日本のもの、あれは中国のものと断定する必要もない。たとえ断定しようとしても、必ず不毛な議論に終わるに違いない。筆者の主旨はむしろ次の一点を強調したい。即ち、魯迅作品にある日本語的表現要素を通して、我々は今日学ぶべきものがある。それは、異文化交流が自らの民族文化を豊かにすることができ、また、発展させる原動力にもなり得るということである。

注

- 1) 本稿は2005年4月16日～20日、中国紹興市で開かれた「2005海峽兩岸越文化討論会」の提出論文を基に手を加えたものである。
- 2) 1917年、胡適が『新青年』2巻5号で、「文学改良台議」を発表し、陳独秀が『新青年』2巻6号で「文学革命論」を発表した。これによって、中国現代文学の白話文運動が正式に幕開けたのである。
- 3) 高名凱・劉正琰『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社、1958年。
- 4) 高・劉、前掲書、138頁。
- 5) 王立達「現代漢語中從日語借来的詞彙」『中国語文』1958年2月。
- 6) 張応徳「現代漢語中能有這麼多日語借詞嗎？」『中国語文』1958年6月。
- 7) 王力『汉语史稿』、中华書局、1980年、525頁。
- 8) 山東大学信息研究所研製の網絡教育課程『現代漢語』第四章「語彙」<http://www.yyxx.sdu.edu.cn/chinese/index.htm> 2005年9月24日。
- 9) 王立達「從構詞法上弁別不了日語借詞 和張応徳同志商討漢語里日語借詞問題」『中国語文』1958年6月。
- 10) 掘作「異文化コミュニケーションにおける文化的ノイズに関する一考察 日本における中国語教育の場合」、成蹊大学『一般研究報告』第31巻、平成11年1月。
- 11) 周作人『魯迅的青年時代』河北教育出版社、2002年。
- 12) 『朝花夕拾』、『魯迅全集』第2冊。
- 13) 魯迅日記は1912年5月から始まっているため、日本在留時期の生活情報はほとんど空白状態になっている。
- 14) 周作人『魯迅的青年時代』、『周作人自編文集』河北教育出版社、2002年。
- 15) 夏目漱石、永井荷風など少数の日本作家との接点は僅かながら、言及したところがいくつかある。周作人『魯迅的青年時代』。
- 16) 『華蓋集続編』、『魯迅全集』第3冊。
- 17) 「三一八惨案」、1926年3月16日、日本政府が軍艦を天津の大沽口に派遣し、18日を期限に、中国政府に大沽口の防衛を撤去せよと通告したため、北京市民が天安門で抗議集会を行った。しかし、段祺瑞臨時執行政府の警護隊が市民に対し実弾鎮圧に乗り出し、結局、死者40人あまり、重軽傷百人あまりの重大事件になった。
- 18) 中教育星軟件技術有限公司の Web ページを参照。http://zhjyx.hfjy.net.cn/RESOURCE/GZ/GZYW/DGJC/GZYW1/DY2/JNLHZJ/1322_SR.htm また、網易教育論壇の Web ページも参照してください。http://bbs10.netease.com/teach/read.php?forumcode=5&postid=19722&all_threadpage=&pageid=1 とともに2005年9月23日。
- 19) 『朝花夕拾・藤野先生』:「这藤野先生, 据说是穿衣服太模胡了, 有时竟会忘记带领结; 冬天是一件旧外套, 寒颤颤的, 有一回上火车去, 致使管车的疑心他是扒手, 叫车里的客人大家小心些。」
- 20) 周作人『魯迅的青年時代』, 「魯迅与弟兄」86頁。
- 21) 内田百閒『百鬼園隨筆』。
- 22) 本稿の試訳はすべて筆者によるものである。語源を考察するため、あえて意識をせず、できるだけ原文の語彙を活かして読み下し式な直訳をしている。試訳に異議ある方は、竹内好らが日本語訳した『魯迅全集』を参照してください。
- 23) 『墳』、『魯迅全集』第1冊。

24) 例えば、『呐喊』自序：「因为从那一回以后，我便觉得医学并非一件紧要事，凡是愚弱的国民，即使体格如何健全，如何茁壮，也只能做毫无意义的示众的材料和看客，病死多少是不必以为不幸的。」また、『阿Q正伝』結尾の阿Q刑場へ行く場面。「阿Q被抬上了一辆没有蓬的车，几个短衣人物也和他同坐在一处。这车立刻走动了，前面是一班背着洋炮的兵们和团丁，两旁是许多张着嘴的看客，后面怎样，阿Q没有见。」

キーワード：魯迅 日中同形語 中日同形語 日語借詞 出離憤怒

(CHEN Zhongqi)